



## 第2回 NCDA ウェビナー、2020年5月2日（土）、15:00～16:00（日本時間）

概要（※ただし、逐語的な記述ではなく、大意で訳していることをご了承ください）

### 【趣旨文】

ヨーロッパや北アメリカにくらべ、アジア・オセアニアの多くの国は、コーチングの質を高めていくためのシステムを有していません。コーチングシステムを発達させるために情報収集をしようとすると、ヨーロッパや北アメリカの議論の中に入っていかなざるを得ませんでした。距離的に近い、アジア・オセアニアの国々が協力し合って、それぞれのコーチングシステムを発展させられるようになれば、この地域の国々のメリットになるだけでなく、世界のコーチングのレベルアップに大きな貢献ができると思います。

今回は、「コーチデベロッパーシステム構築」をテーマに、オーストラリア、シンガポール、パプアニューギニア、日本から話題を出し合って、アジア・オセアニア地域での協力体制をどう築いていけるのか、意見交換をしたいと思います。

### 【内容】

#### 伊藤雅充の話（0:20-11:25）

- ・今回のウェビナーの趣旨。これまでは質のよいコーチングの話聞くために、北米、欧州、オーストラリアやニュージーランドに行かなければならなかった。アジア・オセアニアでは質のよいコーチングのニーズがある。そこで同じようなタイムゾーンで、よりよいコーチングシステムについて共有するのが重要だと考えたのが、今回のウェビナーの始まり。
- ・日本の現在のコーチ育成の状況について。日本スポーツ協会では、近年、コーチ講習会のやり方を従来の講義形式からアクティブラーニングを取り入れた形式へ変更した。その4日間の大まかなスケジュールと、講習会を担当するコーチデベロッパーに求められる資質能力の説明を行った。現在は、コーチデベロッパーが講習会講師の役割を担っている。
- ・日本のコーチデベロッパーシステムには、さまざまな「強み（strength）」と「弱み（weakness）」、「機会（opportunity）」と「脅威（threat）」がある。「強み」としては、ハードワークの文化、日本スポーツ協会によるコーチ教育の長きに渡る歴史があることなどがある。「弱み」としては、変化に対する抵抗があること、階級的な社会、トップダウン

的な教育など。また、「機会」としては東京オリンピック・パラリンピック、国際的なパートナーがいることなど。「脅威」としては、新型コロナウイルスの状況、東京オリンピック・パラリンピック後の状況、国際的／国内的な競争などがあげられる。

アシュリー・ロス氏（オーストラリア、NCDA 第4期生）の話（11:30-20:00）

- ・現在のオーストラリアの「強み」としては、オーストラリアには、スポーツが文化としてしっかりと根づいていることがあげられる。2回のオリンピックの開催や、FIやテニスの大きな国際大会も開催している。オーストラリアンフットボールやクリケットも盛んである。スポーツは自分たちの生活の一部になっている。
- ・NCDA のプログラムを経験したコーチデベロッパーたちが多くいることも幸運な点（ミシェル・デ・ハイデン、ドナー・オコナー、ジーン・シェンブリ、ボブ・クルージングトンなど）。
- ・「弱み」としては、以前には1980年代に展開されたコーチ資格システムがあったが、現在ではなくなってしまい、コーチ資格システムが欠けている。それでも個々では素晴らしい働きをしている人たちもいる。それでも、中心となるものがないというのが現状。自分自身はNCDAでスキルを学ぶことができたが、現在は国としてのシステムがないことを痛感している。
- ・もう一つの「弱み」としては、コーチの学びについて共通の言語がないという点があげられる。
- ・さらに「弱み」としては、一貫した戦略が欠けている点もあげられる。多くのコーチたちが現場で学ぶが、それをフィードバックするなどのサポートが少ない。本来ならもっとコーチデベロッパーから学べることもあるのに実際はそうっていないという現状がある。もっとリソースを賢く使わなければならない。
- ・「機会」としては、すでにNCDAのプログラムを修了した者たちがいるし、ニュージーランドで自分たちと一緒に活動してくれるアンディ・ロジャースやヒュー・ガルバンなどの仲間もいる。NCDAは今では、コーチデベロッパーのスキルだけではなく、システムを作る能力を向上させることにも主眼をおいているが、それは自分にとってはすごく興味のあること。
- ・「脅威」としては、新型コロナでどういう影響を受けるかわからないということがある。この後、スポーツがどうなるかわからない。またコーチの学びに関しては何らかのパラダイム・シフトがあるかもしれないという点もある。

ジャッキー・トラヴァーツ氏（パプアニューギニア、ハイパフォーマンスコーチ）の話（20:00-31:00）

※現在の新型コロナの状況について説明

- ・「強み」としては、アスリートたちが「ステイホーム・ステイセーフ」の原理にそって練習をすることができている。また、ポジティブなマインドセットを持つことができてい

る。

- ・「弱み」としては、ソーシャルディスタンスがあるので、コーチとアスリートが対面して練習をすることができないし、施設が使用できない点がある。
- ・「機会」としては、自己評価をする機会があるという点などがあげられる。また、オンラインで色々学ぶことができるという点もある。また、日々のコミュニケーションが重要である知る機会だった。
- ・「脅威」としては、やはり新型コロナに感染してしまう可能性があることがあげられる。また、練習も十分にできていない点もある。

→伊藤より質問「コーチングのシステムの方はうまく動いている？」

- ・パプア・ニューギニアにはコーチングのシステムがない。だから、コーチングはコーチの経験によるものになっている。

→伊藤より質問「コーチデベロッパーは機能しているか？」

- ・よいコーチデベロッパーがよいコーチを育てると思うけれども、今はパプア・ニューギニアにはコーチデベロッパーがいないので、この国でもそのシステムを始めるべきだとは思っている。

アザール・ユゾフ氏（シンガポール、コーチ SG ディレクター）の話（31:00-54:30）

- ・はじめる前に、リスナーの人たちが自国のコーチングシステムの成熟度合いについてどのように考えているか、メンティメーターを使って確認することにしたい。多くのリスナーたちは、成熟度合いを低く見積もっていることが判明する。
- ・「私たちは巨人の肩の上に立っている」という現実がある。
- ・スポーツの本当の価値とは何か。「シンガポールビジョン 2030」の「スポーツを通じてよりよく生きる」ということを達成するために、スポーツを「戦略」として使う。ジョセフ・スクーリングがリオ五輪で金メダルを獲得したときに、そうしたスポーツの大きな出来事が国を一つにすることを認識した。そして、どうやったら彼の後継者を育成することができるのか、この成功を維持することができるのか、を考えることが大切であると理解した。
- ・そこで、コーチ SG では、「アスリートを育成すれば、一人アスリートを得る。コーチやコーチデベロッパーを育成すれば、より多くのコーチやアスリートを得ることができる」という着想に至り、コーチを育成することに注力した。それがさらなる成功に結びつく可能性を持っていると考えている。
- ・これまではコーチデベロッパーのシステムがなかったが、ICCE や NCDA から色々とシステムについて学ぶことができた。
- ・また、それ以来、世界中の多くの専門家を招聘してきた。また、シンガポールから NCDA のプログラムに参加者を送り出してきた。さらに、シンガポール国内で ICCE のコーチデベロッパープログラムを開催してきた。
- ・また、ICCE や NCDA やカナダコーチ協会などとパートナーシップを結んできた。
- ・システムシンキングアプローチを取り入れて、コーチングのエコ（持続可能な）システム

を確立しようとしている。

- ・シンガポールはアクティブシチズンワールドワイド（ACW）のプロジェクトに加入しており、さまざまなデータを得ている。ACWの他の都市であるストックホルム、オークランド、ロンドンと比べて、シンガポールは高齢者層が身体運動をしているが、若年層はそうでもないことが見えてきた。それにより、若年層に対する体育のコーチングが重要であることがわかってきた。
- ・コーチングに関するさまざまな重要な統計的な数字を提示。
- ・現在の状況として、シンガポールではフリーランスのコーチが多く、新型コロナの影響で生活に困窮するコーチが出てくるかもしれない。それでも、「逆境には機会が伴う」ということを実現するために色々と働きかけるつもり。
- ・コーチたちはそこまでテクノロジーを活用することが出来ていないが、シンガポール全体としてみればテクノロジーは強みであるので、それをもっと活用するようにコーチたちを支援する。
- ・コーチたちがテクノロジーにそれほど強くないので、コーチ SG がそのための IT プラットフォームを作成した。アスリートたちはそれを観ることができる。
- ・また、コーチ SG ではさまざまな e-ワークショップやウェビナーを開催している。その影響力は SNS のデータ解析で見えてきた。多くの注目を集めていることが、自分たちのやり方の正しさを保証するものだと考えている。

#### 伊藤雅充のスピーカーへの質問（55:00-1:00:00）

- ・ここまで4つの事例を見てきたが、一緒に協力し合うことにどういう利点があるだろうか？
  - アシュリー・ロスの応答：ここにはすでに専門性を持った者たちが集っているわけだから、そのなかで協力し合うことは大切。また、それぞれのコンテキストは異なっていることを理解して、そのなかでも適用できるものは適用するようにする。
  - アザール・ユゾフの応答：コーチ SG はすでに述べたように多くのことを他の組織、他の国々から学んでいる。
  - ジャッキー・トラヴァーツの応答：私たちの国でもコーチングの知識を得られることはとても重要だと思う。
- ・お互いを刺激し合うことで、新しい知識などが生まれて来る可能性がある。アジア・オセアニアには、異なる点もあれば、似ている部分もあるから、それを活かす必要がある。
- ・デイブ・レイノルズからの質問で「新型コロナ後にも現在のウェビナー開催などの流れを継続させることができるのか。過去には戻らないようにするために」というのがあるが、どうだろうか。
  - アザール・ユゾフの応答：こうやってはじまったウェビナーは多くの人たちが参加していて、素晴らしいことだし、新型コロナがなかったからこのようなことも起こらなかったかもしれない。いまは、このウェビナーや ICCE のウェビナーなどもあり、強固なコネクションをつくるべきだろう。

- アシュリー・ロスの応答:「意志のコラボレーション」という考え方を気に入っている。  
専門性を持った人たちを発掘して、一緒になれるように後押しし続けることが大切。  
→ジャッキー・トラヴァーツの応答:コーチたちとお互いに支援し合えばいい。

## 【ナビゲーター及びスピーカーの紹介】

ナビゲーター:伊藤雅充(NCDA 副ディレクター、本学コーチングエクセレンスセンター長)

スピーカー:

アザール・ユゾフ氏は、シンガポール・スポーツ協会のコーチ・シンガポール(コーチ SG)でディレクターを務めている。そのコーチ・シンガポールのアカデミーは、シンガポール国内のコーチ教育と育成を統括している。それ以前には、南洋理工大学にある国立教育研究所で上級講師およびアシスタント長を務めていた。また、過去には国際大会でラグビーのシンガポール代表として活躍した。その後、コーチングと審判の道へと進み、長年に渡りアジア・ラグビー(Asia Rugby)のエリート委員会やパフォーマンスレビュー委員会にも属した。教職にも就いており、さまざまな学校で教えた後に、南洋理工大学に赴任して、カリキュラムや指導や学習を専門とする学術スタッフを務めた。また、複数の競技で公認コーチの資格を有しており、さまざまなスポーツ経験があることでシンガポールのあらゆるスポーツにおいてコーチ教育と育成を先導する役割を担っている。そのなかでは、スポーツコーチングの価値を高めることを目指し、「スポーツを通じてより善く生きる」という国の目標を実現するために尽力している。尚、NCDA では第7回国際シンポジウム(2020年2月15日)にて、シンガポールのコーチ育成の取り組みを紹介するプレゼンテーションを行っている。

ジャッキー・トラヴァーツ氏は、パプアニューギニアのハイパフォーマンス部門でアスレチックコーチおよびパラスポーツコーディネーターとして勤務しており、パプアニューギニアにおけるパラスポーツのプロモーションやアスリート/コーチ育成などに取り組んでいる。また、現役のアスリートとしても活躍しており、2019年のサモアで開催されたパシフィックゲームズに出場した。さらに、学ぼうとする意欲に溢れたよきコーチとして、自分自身のコーチングを向上させ、パプアニューギニアのコーチング環境をよくするために、さまざまな試みに全力を投じている。

アシュリー・ロス氏は、NCDA 第4期(2016-17年)修了生であり、2017年にNCDA 第5回国際シンポジウムにてプレゼンテーションを行い、さらに2018年にはNCDA コーチデベロッパー発展プログラムを修了した。35年以上に渡り、世界のさまざまな場所で男女を問わずスポーツのグラスルーツレベルのチームから世界トップのチームまで、アスリートのコーチングやコーチの養成に関わってきた。現在は、南オーストラリア州スポーツ研究所でコーチ育成部門を主導している。